

# アヴァンギャルドとしての自衛隊

— 将来の軍隊における軍事化された男らしさ<sup>1)</sup> —

サビーネ・フリーシュトゥック

## 目 次

- 1 はじめに 自衛隊へのアプローチ
- 2 プロジェクトの基本方針
- 3 皇軍兵士
- 4 米軍兵士
- 5 サラリーマン
- 6 おわりに

## 1 はじめに 自衛隊へのアプローチ

憲法上で明らかに制限されているにもかかわらず、日本は、すでに世界で最大級の軍事予算を持つ国の一つであり、陸海空から成る自衛隊には、およそ 23 万 6 千人の自衛隊員がいる。また、自衛隊は、師団や隊など、軍隊に準じた組織から成り立っている。自衛隊は、戦車、軍艦、戦闘機の他、様々な最新軍事設備を持っているが、核兵器やいわゆる「攻撃兵器」は持っていない<sup>2)</sup>。

自衛隊と聞くと、軍隊、防衛、武器、災害派遣、国際平和協力業務、防衛庁のスキャンダル、日米安全保障条約などを想像することが多い。メディアで取り上げられる多くは、東南アジアの防衛問題における自衛隊の役割の可能性について、また憲法第 9 条と自衛隊との関係、2001 年 9 月 11 日の米国同時多発テロ事件以降の新しい自衛隊法についての議論、あるいは政治学や法学的な研究などである。社会学者が自衛隊について書いた文献は驚くほど少ない。自衛隊は、ある意味で存在してはいけないはずのものであり、軍隊としてのステータスが明確でないがゆえに、研究対象として取り上げにくいからかも知れない。少なくとも日本の社会学者は自

---

カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校準教授

衛隊を研究対象として取り上げてこなかった。このように、社会学者が自衛隊を研究対象として敬遠する態度は、それ自体、学界内の問題として興味深い。私はこれまで殆ど無視されてきた自衛隊を取り上げ、ジェンダーの視点から「自衛隊における男らしさ」を分析してみた。以下にまず自衛隊についてのプロジェクトの背景を紹介したい。

## 2 プロジェクトの基本方針

最初に、調査方法について簡単に述べたい。1998年の7月から東京周辺の基地においてフィールドワークを開始し、2001年に陸上自衛隊の基地で一週間の参与観察を行い、2003年8月までに、16か月間のフィールドワークを行ってきた。この間、160人の個人インタビューとフォーカスインタビュー、駐屯地・部隊訪問、基地での一日か二日の見学を数回行った<sup>3)</sup>。また、自衛隊が行う公的な活動への参加、防衛大学校開校祭の見学、自衛官との飲食などが含まれている。幸いにも、私の関心が学問的なものであることが認められ、何人かの自衛官が私を自宅に招待して、コーヒーを飲みながら、自衛官としての生活について話してくれた。また、自宅に泊まらせてもらい、翌日富士演習場へ連れて行ってもらったこともある。防衛大学校や米軍基地のある横須賀の居酒屋にも何度も連れていってもらった。ほかにも何人かの米国、韓国やドイツなどの大使館付き陸軍武官、軍事評論家、自衛隊の隊友会の代表者たちにインタビューをしてきた。さらに、フィールドワークと並行して、自衛隊による出版物や自衛隊に関する資料を集めてきた。この中には自衛官募集ポスターとパンフレット、防衛庁のイメージ・キャラクター「ピクルス王子」と「パセリちゃん」が登場する漫画がある。また、防衛庁や様々な自衛隊地方連絡部が出版する雑誌とニュースレター、一般雑誌に載った自衛隊についての記事やOBが書いた自衛隊についての本などもある。これらは自衛隊についての日本における言説を理解するために集めた資料である。

インタビューの対象については、四つの特色がある。まず、第一に、陸・海・空の自衛隊のなかから、私は陸上自衛隊を選んだ。陸上自衛隊の隊員数は最大であり、防衛費も一番多い。そのうえ、国防のために成立した日本の自衛隊において、陸上自衛隊が最も重要視されているという事情がある。さらに、陸上自衛隊みずからの認識によれば、人間が一番大切な役割を果たしているのは、海でも空でもなく、陸なのである。なぜなら海や空の主役は、器械やテクノロジーだからである。

第二に、自衛隊の中には色々な職種があるが、インタビューの対象は自衛官に限った。

第三は、インタビューを実施する地域について。1998～1999年に行ったインタビューは関東の基地に勤務する自衛官に限ったが、2001～2003年にインタビューした自衛官は、関西と中部、つまり京都府と愛知県にある駐屯地に勤務している人を含めている。訪問する部隊の地

域にこだわるのは、東京で仕事をしている自衛官と北海道や九州のような地方の基地に務める自衛官とでは意識も違ふし、自衛隊と地域社会との関係もおのずと違って来るからである。また一般に「周縁」と考えられている北海道や九州は、自衛隊の立場からみると軍事的には自分たちが「中心」であり、東京は「周縁」になるのである。

第四は、自衛官の位階に関するものである。「自衛官」は任期制自衛官と非任期制自衛官とに分かれている。さらに、非任期制自衛官はまた四つの位階に分かれている。一番下の位階は「士」で、その上に、「曹」と「准尉」がいる。一番上の位階は「陸将」や「幹部自衛官」である。できればすべての位階の自衛官にインタビューを行いたかったが、やはり紹介してもらった人の三分の二ぐらいは幹部自衛官である。規則では、中学校か高等学校を卒業後に入隊した隊員にも幹部自衛官まで昇級する可能性はあるが、実際には幹部自衛官のほとんどが防衛大学または防衛医科大学ないし一般大学を卒業して、自衛隊に入った人である。幹部自衛官はさらにいくつかのランクに分かれているが、すべてのランクの人にインタビューすることができた。

私はここ数年、自衛隊を研究対象として扱っているが、以下、その基本的な問題意識を紹介したい。それは、自衛隊と一般社会との関係に関する考察である。これは、近い将来、『アヴェンギャルド——将来の軍隊』というタイトルで本を出版する予定である。ここでは日本の自衛隊こそが将来型の軍隊であるという根本的な仮説を設けている<sup>4)</sup>。つまり、他の民主国家の軍隊も、いつかは自衛隊のような軍隊になるということを意味している。ここで、私はチャールズ・モスコスとピーター・バークがいうところの「ポストモダンな軍隊」の特色を紹介したい<sup>5)</sup>。なぜならば、それらは、現在の自衛隊に妥当すると思うからである。自衛隊の状況にあてはめて説明すると、第一の特色は、ポストモダンな軍隊では、軍人であることは特別な職業ではなく、一般の職業と変わらないということである。「特別国家公務員」と呼ばれる自衛官は、ウーテ・フレーフェルトが作った「軍服を着た国民」という現在のドイツ兵士を意味する表現と似ている。「軍服を着た国民」は民主主義国家や人権を守る意識が強く、「私たちは未来を作る」というドイツ軍のスローガンの下で活動する<sup>6)</sup>。自衛隊には新しいイメージ・キャラクター「守るくん」と「未来ちゃん」がいるが、一般的に言えば、国を守ることは、地元を守る、あるいは家族を守る、愛する人を守るのと一緒だと、防衛庁広報室は一生懸命提唱してきた<sup>7)</sup>。

モスコスとバークが提唱する「ポストモダンな軍隊」の第二の特色は、戦争を行う、いわゆる伝統的な軍事活動よりも国際平和協力業務や災害派遣、治安維持、そしてスポーツ大会の準備などの「新しい」業務が増えるということである。自衛隊が創設時からこのいわゆる「新しい」業務に携わってきたことを誇りに思うベテラン自衛官は少なくない。若い新隊員も同様である。例えば、1999年にインタビューした防衛大学の一年生は入学の動機の一番は「両親に経済力がないから」だったが、テレビで災害派遣活動に参加した自衛官の姿を見て、皆の役に

立つすばらしい仕事であると感じたことが大切な動機になったそうである。もう一つ例をあげると、旧日本軍とは無縁に育った戦後の最初の世代にも、防衛大学生と似たような考え方があがる。あるベテランは「歩兵部隊にはフラストレーションがあったらしいけど、私たちエンジニアリング部隊は、東京の再建に尽力できたことを誇りに思っている。今日でも東京のあちこちで私たちが建設を手伝った建物を眼にするたびに誇らしさを感じる」<sup>8)</sup>。

「ポストモダンな軍隊」の第三の特色は、一般社会における軍隊に対する態度は以前よりも否定的もしくは無関心になるため、軍隊による広報活動がその存続には非常に重要であるということである。自衛隊の広報活動費についての具体的な数字は発表されていないが、毎年何万人もの人が見に行く富士演習場での活力演習や、朝霞駐屯地で行われている観閲式、陸上自衛隊広報センターにある各基地の広報が発行する豪華なパンフレットなどを考えてみるだけでも、かなり高いことが分かるであろう。こうした広報活動が、過去十年間の世論に影響を与えた可能性は大いに考えられる。内閣府大臣官房政府公報室が編集した「自衛隊と防衛問題についての世論調査」によると、冷戦以降、自衛隊の評判はよくなってきた。「自衛隊が必要ではない」と思う人の数や「自衛隊が違法的な組織である」と思う人の数が下がってきた。例えば、「自衛隊や防衛問題への関心がある」と答えた人の割合は1991年から2003年までに67.3%から59.4%へ下がったのに対して、「自衛隊への全般的な印象が良い」と思う人は67.5%から80.3%まで上がってきた<sup>9)</sup>。

第四は、女性や同性愛者も軍隊に受け入れられてきたことである。法律上、自衛隊は、女性を完全に受け入れてきた<sup>10)</sup>。ルート・ザイフェルトが書いたように女性を軍隊に入れる動機やそのプロセスのあり方は各軍隊によって異なるが、「女性兵士」に対しての自衛隊のメッセージは、一方では「女性だから」できる仕事があることであり、もう一方では「女性でも」仕事があるということである<sup>11)</sup>。国政や警察など、国家が司る他の分野と比較すると、いかに自衛隊が普通で、進歩的で、国際化されているかを強調するために、婦人自衛官が旗印として用いられている<sup>12)</sup>。同性愛者の受け入れについては今まで触れていないそうである。私が自衛官に聞いた限りでは、性生活についての質問は「プライバシーの侵害」ゆえにないらしい。米軍における同性愛者に対する差別にはじまって、ヨーロッパのほとんどの軍隊の完全平等に至るまで、軍隊における性のプライバシー論は色々な形で出て来る<sup>13)</sup>。自衛隊が性に関するプライバシーを認めるのは、同性愛者に対しても平等に扱うという意味かどうかは不明であるが、少なくとも一般の社会と一緒であり、入隊試験を受ける時にも身体検査を受ける時にも性に関する質問はないそうであるから、米国で見られるような同性愛者への法律上の差別はないことが分かってきた。2003年2月にインタビューした海上自衛隊の幹部自衛官は「自衛隊はまだまだセクハラに対する規約を作るのに忙しく、同性愛を問題にする時間はなかった」と私に語ったが、米国と比較して法律化されることが少ない日本の社会にそういう議論が必要かどうかは疑

問である。

第五は、仕事内容が変わることで、軍人の理想像が多様化する。その結果、かつて軍人の最も重要な理想像であった「戦士」の要素が縮少していくということである。自衛隊においては「戦士」を理想像として構築することは困難であった。以下の分析を通じて説明するように、創設時から多様化された理想像があったからだろうか。

以上のように「ポストモダンな軍隊」に見られる五つの特色がそのまま自衛隊の特色でもあると考える。しかし、以下のような逆説も存在する。ある自衛官は、日本以外の国にはどこでも「本当の」、「普通の」軍隊、つまり戦うことを目的とする軍隊が存在しているが、自衛隊だけは違うという不満を語っていた。別のエリート幹部自衛官は、自衛隊は将来の軍隊の先駆（パイオニア）などではなく、国際社会における様々な軍隊のヒエラルキーの最下位に位置するのが自衛隊なのだ、と語っていた。

本稿では、「ポストモダンな軍隊」であることに満足している自衛官と不満を感じる自衛官の間で構築されてきた理想の自衛官像を通じて自衛隊における「男らしさ」を分析していきたいと思う。ジュディス・バトラーが提唱したように「男らしさ」と「女らしさ」は状態（disposition）ではなく、達成（achievement）である<sup>14)</sup>。そうすると、自衛隊内における男らしさとは、入隊後の訓練や任務の結果である。そこで、「戦士」という軍人の理想像に注目して、自衛隊における「男らしさ」について考察を進めていきたいと思う。その際に、シンシア・エンローによって提唱された、「軍事化され、多様化された男らしさ」という概念を用いたい<sup>15)</sup>。それは、軍隊には男らしさの一つだけではなく、いくつか存在するという視点である。

まず、多様化された男らしさという議論を紹介したのちに、自衛隊における「男らしさ」について考察する。おそらく他の軍隊よりも、自衛隊は多様な男らしさによって特徴付けられている。この多様性とは、組織構造、活動、隊員の発言、および広報活動資料の表現から明白である。自衛隊における、望ましい男らしさは、突然変異や混成を通じて、地理的に位置づけられ、歴史的に確立されてきた。このことは、軍隊における男らしさを達成するための自衛隊、及び各自衛官の努力を表している。以下、隊員の言葉を紹介したい。男らしさに対する態度は、一般的に、年齢、階級、位階、性別によって大いに異なる。ある若い男性将校候補は、想像上の戦闘や戦場での友情を賛美しながら、ハリウッド映画の中で軍の英雄たちが栄誉や地位を受けるのを楽しんでいると、私に話してくれたことがある。もっと控えめなケースでは、55歳で訪れる定年を一般人同様に懸念する中位将校が、「市民の支持と認識の追求」という考えを述べてくれた。別の年輩の自衛官は、自分の定年まで何も起こらないように祈っている、と少しはにかみながら私に話してくれた。

そもそも自衛隊が軍隊であることを認めるのを拒む男性新隊員もいる。二人の子供を持つ、ある婦人自衛官は、「何の目的で自衛隊が訓練をしているのかより、実際に自衛隊が何をして

いるのかを考慮すると、自衛隊は軍隊というより大きな公共事業団体としてみるべきだ」と、私に説明してくれた。

自衛隊の第一の存在理由である国防を否定する自衛官もいる。防衛大学の二年生二人は、もし日本が直接関わるような戦争が起こったら、すぐに自衛隊を辞めるつもりだと、ためらわず話してくれた。未来の自衛官ばかりではない。他の多くの自衛官も、予期せぬ闘争が勃発した場合、すぐに自衛隊を辞めるつもりでいると話した。しかし、自衛隊では、国のための自己犠牲という概念をきちんと教えていないと考えている一等陸佐もいる。

隊員の養成と保護を担う、ある三等陸佐は、「部隊の母」という自分の地位を誇りに思っているという。

自衛官募集担当の三等陸佐は、「私たちは、普通の市民を探している。変な人や過激派は望んでいません」と説明してくれた。自衛隊広報で幅広く使われているスローガンは、やや逆説的だ。「平和を愛する人が欲しい——防衛庁」。地方の連隊雑誌など、その他の主として軍内部や関係者向けの出版物では、自衛官を「普通の人」だと描写している。例えば、京都府福知山での陸上自衛隊第7連隊の月刊雑誌『曹友』2001年4月号は、兵士たちというのは、幸福な家族と新生児と一緒に、自分たちの家をたてるという夢を成し遂げ、ごく普通の趣味、例えば絵画や歴史や料理を楽しみ、愛情を込めて、自分の家族の世話をする、そういう人だという話を掲載している<sup>16)</sup>。

以上のように、自衛隊の中に存在する多様化された自衛官としての理想や男らしさは、ひとりひとりの自衛官によって意識的に具現化されている。軍事訓練をする隊員の男らしさや「部隊の母」である隊員の男らしさ、国のために犠牲になる隊員の男らしさなどを含め、自衛隊には多様な男らしさが存在する<sup>17)</sup>。自衛隊における男らしさの多様性には、じつは非常に重要な制度上の役割が担わされている。そもそも第二次世界大戦とその余波のせいで非常に評判が悪い「伝統的な」日本軍人に代わって、多様化された男らしさが、1954年の創立以来、現在も自衛隊内で受け継がれているのである。さらに様々な役割を自衛隊は引き受けてきた。

自衛隊における男らしさの多様性やその流動性と不安定さについて述べたいと思う<sup>18)</sup>。男らしさとは、必ずしも生物学上の男性の肉体を通じてのみ成立するのではないということを強調した概念である。恐らく軍隊では、ほかの組織よりも、意識的、無意識的にかかわらず、男らしさが捏造され、操作される頻度が高い。この手の捏造や操作はどこの軍隊にもあるが、自衛隊では、より表面的なものとして機能し、自衛隊の公的なイメージや評判の問題、さらに自衛官の士気に影響する内面的な問題として理解されている。私は、この軍事化された男らしさは常に変動し続け、様々な方法で理解されるということを主張したい。私が過去5年以上にわたり、しばしば観察した隊員の態度と行為は、一つの男らしさのタイプから別の男らしさのタイプへの比較的、容易な変換を示している。明瞭に軍人と認識される自衛隊員でも、普段着を着

ていると事務職員として通ってしまう。この変わりやすい状況の中では、一つの男らしさのタイプが、他の男らしさのタイプより「真実」であるとか、見せ掛けであるとか、「隠されている」とか明白だとかいうことは重要ではない。私がここで主張したいのは、自衛隊における男らしさが、主に女らしさとして構築された他者に限定して依存しているのではなく、様々な男らしさのタイプをもつ他者に依存しているということである<sup>19)</sup>。つまり、自衛隊は他の軍隊組織と同じように、部隊の結束性を強めるためにジェンダーのステレオタイプを使っている<sup>20)</sup>。男性の自衛官だけではなく、「婦人自衛官」と呼ばれている女性兵士を自衛隊に受け入れる可能性と彼女たちのあり方にもかなり影響を与えるから、結束性の戦略を明らかにするのは必要だと考えている<sup>21)</sup>。従って、自衛隊においては、「男らしさ」対「女らしさ」といった対立図式だけが存在するのではない。また、絶対的な男らしさへの容易な同一化や認識もない。むしろ、それぞれの「男らしさ」は、望まれている特徴とそうでない特徴との緊張状態、あるいは、同一化の瞬間と分離との緊張状態を具体的に表現している。私の調査によれば、今日の自衛隊、及び各自衛官の間では、「皇軍兵士」、「米軍兵士」、そして「サラリーマン」というジェンダー化された三種類の男らしさあるいは人物像が、曖昧ではあるが意識されていることが分かった。「自衛官としての色々な役割があるから、色々な役割認知がある。例えば、駐屯地長には何百人の自衛官に対する責任がある。駐屯地長である間、駐屯地内でも外でも、24時間しっかりしなくてはならず、リラックスできない。だから、駐屯地長が二、三年ごとに異動するのはいいことだと思う」とフォーカスインタビューの際、ある一等陸佐がニコニコしながら私に語った。もう一人は「ぼくはすごい田舎の駐屯地の長として赴任した日の夕方、町の居酒屋のママさんから、新しい駐屯地長は厳しいという噂だと聞きました」と証言した。到着した日に彼は部下の一人に「シャツをちゃんと閉めて」と命令したので、その厳しさがたちまち噂になったそうである。

東京の市ヶ谷にある防衛庁の建物は新築で大変大きいですが、表面的にはほかの政府のビルと似ているし、夕方、そこから出て来る人たちは、先のインタビューの対象者と同じように、普通のサラリーマンとあまり変わらない姿である。では、自衛官や自衛隊という組織の中で、「皇軍兵士」「米軍兵士」「サラリーマン」という三種類の男らしさがどのように構築されてきたかを以下に説明しておこう。

### 3 皇軍兵士

自衛隊は、「皇軍（皇国）兵士」という男らしさの典型とは距離を置くことでみずからの歴史を独自に創り出し、旧日本軍との関係を明確にすることによって、歴史の中での自衛隊の位置を明確にし、その将来を保証しようとしている。「皇軍兵士」像は、日本国外や日本の軍事

文化の教育の場では自衛隊とは断絶した異文化とみなされていて、防衛庁は当然のことながら、自衛隊との関係が全くないことを強調する努力をしている。自衛官たちに聞いてみると、「皇軍兵士」に対して、「困惑せる侵略者」または「敗者」「名誉の死まで戦った戦士」「規律のない大虐殺を行った者たち」など様々なイメージを持っており、少なくとも自衛隊とは全く関係ないとみなしている。しかし、自衛隊の組織的な言説の中では逆に継続性がおそろおそろ築きあげられている。

本来、過去のヒーローを祀り、価値を与えることは、組織のアイデンティティを作るうえで重要である。会社の基礎を築いた創業者に格別の敬意を払う企業と同じように、軍隊は戦争のヒーローや指揮官や戦略者を崇める。このような歴史を記述するにあたり、間違いや失敗を否定し、削除するのは珍しいことではない<sup>22)</sup>。自衛隊の場合、駐屯地内にある史料館がこのような歴史を語る役割を果たしている。例えば、東京周辺にある駐屯地の史料館は1938年に建てられた。当初は旧陸軍士官学校の建物であった。敗戦後にGHQが使用したが、1952年に自衛隊のものとなった。靖国神社にある遊就館とは違って、この史料館を見学するのは、一般人ではなく、自衛官やその関係者、古くからこの地域に住む人たちなどである。

新隊員はみな史料館を訪ね、日本における軍隊の歴史を学ぶことになっているが、「今の若い人は日本の歴史に興味がなく、学校でもちゃんと教えられていないから、何も知らない」とある史料館長は私に語った。歴史家であり曹長でもある彼によると、日本の歴史が教えられないから、若い新隊員は天皇の意味が理解できず、彼らの頭の中では、旧軍が悪にしかつながらない。皇軍兵士が意味するものは、すなわち攻撃、侵略、戦争、破壊、そして、死、虐殺である。この駐屯地の史料館の展示を見ると、日本には関ヶ原の戦い以降、第二次世界大戦を含め、何百年前から常に脅威が存在し、防衛戦争や解放戦争しか戦って来なかったとでも言いたげだ。ここに表象されている軍人のヒロイズムは、敗戦の経験が影を落としているせいか、あくまで静かだ。そのぶん、犠牲を強調することによって、「天皇のため」、「国のため」という戦争時代の思想を踏襲しているように見える。今日の自衛隊では「天皇のため」という考え方はあまりないようだが、PKO任務から帰国したある二等空佐は、次のような記憶を語ってくれた。彼は、天皇についてあまりいいイメージを持たず、天皇の意味など一回も考えたことがなかったが、自衛隊が参加した最初のPKOのひとりとして天皇から勲章を授与された瞬間に「何か私たちよりも偉い存在だ」と感じた。そして、「兵士であること、国を守ることは何か、がこの瞬間に初めて分かった」そうなのである。

このような図式において、自衛官が「皇軍兵士」像を進んで受け入れるはずはない。自衛隊は、皇軍兵士とはなんら関係のない、別種の危険や暴力に取り組んでいると彼らは考えている。別種の危険や暴力とは、つまり、自然災害現場からの救出作戦や日本国民を守るための危険等を指す。「戦う軍隊」の目には、救出援助作業は、去勢されて、非軍事化された行為に映るか



も知れない。しかし、自衛官たちは、自衛隊に入隊した日からずっと、災害救援こそが至高の指命であり、人として、男としての器量を広げる機会だと待ち望んでいるのである。

ここで、ベテラン自衛官である古川秀吉の話を紹介したい。1954年に高校を卒業した彼は、大学に進学し工学を勉強することを望んだが、戦時中に亡くなった父親の「絶対に軍人になれ」という断固とした遺志に従い、しかたなく防衛大学に入った。古川によると、工学部隊では、戦後の労働や建物を立て直すことに満足できたが、歩兵部隊や普通科部隊には不満足だったという。これは、陸上自衛隊内の部隊によって望まれる役割に違いがあることを示している。

1980年代のJAL機衝突事故の救助に参加した江口誠三等陸佐は、当時救助できた被害者の名前を1999年のインタビュー時にはっきり記憶していた。このように災害救助の経験は、自衛官としての自信に大きな影響を与えるのである。もっと最近の例を挙げれば、防衛大学一年生の中には1995年の阪神淡路大地震での自衛官の救助活動をテレビで見て自衛隊に入りたくなった人が多い。ここから若い世代の自衛官にとっても、伝統的な軍人の役割以外の仕事が魅力的に感じられていることが分かる。防衛大学の学生は、「皇軍」からできるだけ遠ざかろうとする傾向が強いようだ。自衛官は自衛隊の前身が皇軍だったとはおよそ知らないのではないかと思われるほど、歴史について無知である。かつて日本帝国の植民地であった国の武官は、次のように言う。「自衛官はプロであり、信頼できると思う。昔のような侵略戦争を繰り返す心配は全くない。しかし、彼らのお父さんやおじいさんが私の国に何をしたのかを50歳の幹部自衛官に説明する時、怒りを感じずにはいられない。彼らがあまりに何も知らないからだ」と、その武官は、皇軍兵士と自衛官との微妙な関係を理解している。皇軍における帝国主義も、一部の皇軍兵士に存在した残虐性も、現在の自衛隊にはとりあえず存在しないが、確固たる歴史認識や過去の反省の上に立っているわけではないので、自衛官が意図的に新しい男らしさを構築しているかどうかに関しては疑問だと考えているようだ。

#### 4 米軍兵士

「米軍兵士」という男らしさのタイプは、アジアや全世界の地理的な空間と政治的な空間の中で、有利な位置を保っている。多くの自衛官にとって、男らしさを構築するうえで最も影響を与えてきた人物像は米軍兵士である。米兵は、ある自衛官にとっては「より望ましい兵士」と感じられる一方で、ある自衛官にとっては「永久に自分たちを去勢しようとする脅威」でもある。米兵は1945年の日本の敗戦を思い起こさせる一方で、日米安全保障条約におけるより強力なパートナーとしても見られてきた。米兵は国際安全の鍵であり、多くの自衛官にとって、米軍は、「ユニーク」な自衛隊に比べて、「普通の軍隊」に見える。米兵は、皇軍と同じく攻撃と暴力によって特徴付けられるが、米兵の「近代性」は、明かに皇軍と異なる。自衛官は米軍

兵士のことを本当のプロだと誉めているが、さらに詳しく聴いてみると、男らしさに関して自衛官が抱くイメージがわかって興味深い。自衛官は、米兵が訓練において彼らより射撃が上手であるとか、軍人にふさわしい肉体をもっているとか、飛行機から飛ぶ時により勇気があるなどとは思わない。ただ、共同訓練をカルチャー・ショックとして経験する人がいる。ある自衛官は、目の前にいるのが「本物の軍隊」であることがすぐに分かったと言う。別の自衛官によると、米兵は戦う能力の基本は強い体だからと、朝から晩まで走っていたと言う。共同演習の時、あまりの寒さに二人の米兵が走るのをやめて屋内に入ることを希望したが、米軍指揮官はそれを許さなかった。二人の健康上の心配よりも部隊の士気に及ぼす影響を重視したのである。「安全第一の自衛隊」にとっては信じられないことだとこの自衛官は考えている<sup>23)</sup>。もう一つの例を挙げると、米兵は演習場を戦場と考えるので、演習が終わればそのまま帰る。それが自衛官たちには許せない。彼らにとって、演習場を掃除し、使用済みのカートリッジや銃弾を一つ残らず撤去するのは任務のうちだからだ。以上の例で明らかになったように、米軍兵士像は自衛官の男らしさに関するジレンマの元凶でもある。つまり、世界最大、最強の軍隊である米軍との共同演習に参加した経験、あるいは米軍兵士との交流は、英語ができることと同じように、各自衛官のステータスや誇りとなり、キャリアに影響する。その一方で、弱いパートナーとして、共同で使用した演習場を片付けたりするのは、自衛官の男らしさを損なう行為と考えるのである。

## 5 サラリーマン

「サラリーマン」あるいは事務職員は、自衛官の男らしさを左右する三つ目の重要な人物像である。サラリーマンは「企業戦士」として日本国内外の大衆向けのメディアや広告の世界で美化されてきたにもかかわらず、自衛官は「サラリーマン」を軽蔑し、サラリーマンにはなりたくないと思っている。それは、暗に、自分たちの「男らしさ」を強調したいためとも言える。1982年に『日本のサラリーマン』について書いた千石保によると、サラリーマン像は両極的である。それは「終身雇用構造の中での安定と、一生そこで過ごすことからくる人間葛藤の緊張で、満足と不満が同居しているように見える」ところに由来する<sup>24)</sup>。経営人類学の基礎を築いた中牧弘允が指摘するように、日本には200万を超える会社が存在し、1990年には、労働人口に占める給与生活者数は80%を超えている<sup>25)</sup>。この数字から、現在の日本の男らしさを考えるうえでサラリーマン像が重要なことがわかるが、自衛官たちは「仕事のために自分を犠牲に」し、会社のために戦うサラリーマンに反発する傾向がある。一般的に、幹部でない自衛官は、地方の農家や労働階級出身であり、彼らにとって、サラリーマンの魅力とは、標準的な中流暮らしや事務職員の地位などにある。しかし、これらの標準さは、嫌悪的でもある。彼

らの考える男らしさとは、軍事化された生活の中での英雄的行為や冒険などにあるからだ。

一方、幹部自衛官にはサラリーマンのような生活を送る人が非常に多く、彼らが抱くサラリーマン像は、幹部ではない自衛官の抱くサラリーマン像とは微妙にずれる。防衛大学か一般大学を出て、自衛隊内の出世を目指すエリートは、信じられないほど「デスクワーク」が多く、軍服を着てはいても、サラリーマンと同様の業務をこなすことが多い。そのうえ、基地を出る際には、私服に着替えるので、基地外では普通のサラリーマンに見える。しかし、彼らに自衛官としての不満を聞くと、以下のような返答が返ってくる。それは、「他の自衛官と一緒にフィールドにいたい、サラリーマンみたいな生活になってしまった」という忸怩たる心境だ。逆に、自衛隊の長所として「少なくとも仕事が5時に終わってからは自由で、サラリーマンみたいに夜遅くまで会社に対しての忠誠心を証明する必要はない」という点を挙げる幹部自衛官もいる。

## 6 おわりに

近代の軍隊において明確で一義的な男らしさが存在することは神話でしかないが、現在の自衛隊における男らしさの概念は、かなり複雑なプロセスを踏んだうえで構築されている。以上に検証したように、自衛隊の男らしさは、「皇軍」から距離を置き、「米軍」とある程度まで肩を並べつつ、一般社会に溶け込ませることから位置づけられている。今日の自衛隊における男らしさとは、「戦士」という古典的な軍人像や男らしさの理想像ではなく、「皇軍兵士」や「米軍兵士」あるいは「サラリーマン」などの人物像を意識することによって複合的に構築されている。しかも、それは、これまで何人かの研究者が議論してきたような絶対的で唯一の男らしさではなく、流動性に富み、不確定なものである。本稿では、自衛隊内に見られる日本の歴史や文化から創出される男らしさの多様性の分析を行い、私のプロジェクトである『アヴァンギャルド——将来の軍隊』内での、一つのテーマとして議論を試みた<sup>26)</sup>。男らしさの多様性を理解するには、自衛隊内の男らしさの働きを探るだけでは不十分であり、相関関係や同盟ないし従属関係について考察する必要があると R. W. コンネルは示唆している。R. W. コンネルによれば、多様化された男らしさには、「男らしさのヒエラルキー」があるという<sup>27)</sup>ここで私が指摘しておきたいのは、「男らしさのヒエラルキー」は自衛官個人や自衛隊組織にとって固定的・絶対的なものではなく、非常に不安定であるということである。つまり自衛官の任務や自衛隊を取り巻く状況によって、男らしさのヒエラルキーは刻々と変化していく。この点にこそ、「戦士」を理想とする軍隊とは対照的な、自衛隊ならではのポストモダニズムやアヴァンギャルド性が見えてくると考える<sup>28)</sup>。

注

- 1) 2003年3月から8月の間、客員研究員として京都大学人文科学研究所に招待され、アジアにおける軍隊を研究するユニークなネットワークの一員として仕事をしてきた。田中雅一先生にも人文研の皆様にも心から感謝したい。この論文のドラフトを二回口頭で発表した。一つは人文科学研究所で行われた「フェティシズム研究の射程」で、もう一つは京都人類学研究会である。参加者の皆様、とくに後者のコメンテーターであった宇田川妙子先生（国立民族博物館の助教授）に感謝したい。宮西香穂里さん（京都大学大学院人間環境学研究科）や太田敦子さんとの話し合いや論文の校正を通じて、論旨が明確になったことに感謝したい。
- 2) Stockholm International Peace Research Institute (SIPRI) によると、世界中の軍備費は1987年から1998年まで世界的に減らされたが、1998年からまた増えてきた。その一番大きな原因は米国の軍備費の増加であるが、1999年の日本の軍備費も10年前より20%増加した（U. S. State Department: <http://state.gov/t/vc/rls/rpt/wmeat/>, 2003年6月4日）。軍備費の多い順に上位15カ国の合計が世界中の軍備費に占める割合は約75%であり、上位5カ国がこの半分を使っている。すなわち、米国（36%）、ロシア（6%）、日本・フランス・英国（5%ずつ）である（SIPRI: [http://projects.sipri.se/milex/mex\\_trends.html](http://projects.sipri.se/milex/mex_trends.html), 2003年4月13日）。
- 3) 私がインタビューした自衛官の個人名は全て仮名である。
- 4) 私がここに用いた「アヴァンギャルド」という表現は、十五世紀から十八世紀までイギリス軍隊用語であった。当時は「advance guard」と呼ばれたが、1910年前後に、芸術の世界に駆り出され、フランス語の「avant garde (アヴァンギャルド)」が使用されるようになった。
- 5) Charles C. Moskos and James Burk. 1998. The Postmodern Military. In *The Adaptive Military: Armed Forces in a Turbulent World*, ed. James Burk. New Brunswick, London: Transaction Publishers, pp. 163–182.
- 6) Ute Frevert. *Die kasernierte Nation: Militärdienst und Zivilgesellschaft in Deutschland* (『基地化された国家——ドイツ社会における軍隊業務』). München: Verlag C. H. Beck, 2001.
- 7) このスローガンはドイツ軍のホームページにも載っている。<http://www.bundeswehr.de/karriere/index.php>; 2003年8月2日。第二次世界大戦とその後の問題に関して、敗戦以降の心理的な損害から現在の兵士の理想像に至るまで日本とドイツには類似点が少なくないが、各軍隊を管理するための戦略や政策が全く違う。ドイツでは再び徴兵制を成立させ、兵士に民主主義を吹き込むことによって兵士の人権を守るために「内部指導主義」(innere Führung) を確立させた。しかし、日本ではある程度まで民主主義を吹き込んだが、自衛隊を管理するための最も中心的な戦略は、自衛隊を政治的にも社会的にも隔離したことにある、とトーマス・バーガーは書いている。Thomas U. Berger. 1996. Norms, Identity, and National Security in Germany and Japan. In *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, ed. Peter J. Katzenstein. New York: Columbia University Press, pp. 334–335.
- 8) 例えば、防衛庁広報室編『ピクルス王子の自衛隊日記』東京、1993年。
- 9) 世論調査のデータは全部内閣府大臣官房政府広報室が2003年に編集した『月刊 世論調査 自衛隊・防衛問題』6月号の3ページや6ページや14ページに乗っている。その調査の目的は「自衛隊・防衛問題に関する国民の意識を把握し、今後の施策の参考とする」であり、調査対象は「母集団は全国20歳以上の者」であり、3,000人の内2,126人(70.9%)が調査員による個別面接聴取に賛成した。調査実施委託機関は社団法人新情報センターであり、調査時期は平成15年1月16日から1月26日までであった。

- 10) 法律上では女性は受け入れられているが、私が別の論文に書いたように、婦人自衛官の実際の経験と、自衛隊広報の中から浮かび上がる婦人自衛官像やマスメディアに見られる婦人自衛官像との間には複雑な緊張関係がある。Sabine Frühstück. “‘Nur nicht kampflös aufgeben!’ Die Geschlechter der japanischen Armee” (「争いなして絶対に任せない！」日本の自衛隊におけるジェンダー) In *Gender und Militär: Internationale Erfahrungen und Perspektiven* (『ジェンダーと軍隊——国際的な経験や観点』), ed. Christine Eifler und Ruth Seifert. Berlin: Ulrike Helmer Verlag (Heinrich Böll Stiftung), 2003, pp. 155–187. 日本でも歴史家や社会学者が軍隊内の女性を議論し始めたばかりである。その中に以下の代表的な論文がある。中山道子「論点としての『女性と軍隊』」『性・暴力・ネーション』江原由美子編、勁草書房1998年、31–60ページ。佐々木陽子『総力戦と女性兵士』青弓社2001年。佐藤文香「日米の女性兵士をめぐるジェンダーイデオロギーの変遷」『女性学』7巻、1999年、132–152ページ。上野千鶴子「女性兵士の構築」『性・暴力・ネーション』江原由美子編、勁草書房1998年、3–30ページ。学者と違って、ジャーナリストや軍事評論家が「婦人自衛官」を例外的な女性か性のシンボルとして取り上げた。その中に以下の代表的な記事がある。阪東刀水子「女子自衛隊員ってどんな生活？」『婦人口論』5号、1990年、284–289ページ。井岡久美「女性自衛官の意識」『セキュリティアン』第2巻531号、2002年、16–19ページ。『週間文春』「婦人自衛官殿に敬礼！」1999年12月16日。『週間現代』「自衛隊女性隊員八人——肌脱いで才色兼備の“実力”披露」1990年11月24日、221–228ページ。『週間新潮』「男にタックルする女二人」1977年2月10日。関崎陽子「女だてらの防大一期生始末記」『新潮』45号、1995年、172–184ページ。『uno!』「戦闘集団『自衛隊』女が望むすべてがここにはある」1997年2月1日、161–165ページ。菊地雅之『がんばれ女性自衛官——We love WAC! WAVE! WAF!』イカロス2000年。
- 11) Ruth Seifert. Militär und Geschlechterverhältnisse. Entwicklungslinien einer ambivalenten Debatte (軍隊とジェンダーという討論の発展について). In *Soziale Konstruktionen — Militär und Geschlechterverhältnis*, ed. Ruth Seifert and Christine Eifler. Münster: Westfälisches Dampfboot, 1999, pp. 44–66.
- 12) 自衛隊の普通化あるいはノーマライゼーションはどういうふうに行っているのかは別の論文で議論した。Sabine Frühstück and Eyal Ben-Ari. “Now we show it all!” Normalization and the Management of Violence in Japan’s Armed Forces. *Journal of Japanese Studies* 28 (1), 2002, pp. 1–39.
- 13) 欧米の各軍隊におけるプライバシー論が以下の論文に分析されている。Aaron Belkin and Melissa Sheridan Embser-Herbert. A Modest Proposal: Privacy as a Flawed Rationale for the Exclusion of Gays and Lesbians from the U. S. Military. *International Security* 27 (2), 2002, pp. 178–197.
- 14) ジェニファー・ロバートソンは日本の歴史におけるジェンダーのアンビバレンスや多義性を分析した。ジェニファー・ロバートソン『踊る帝国主義：宝塚をめぐるセクシュアルポリティクスと大衆文化』堀千恵子訳、現代書館2000年。達成 (achievement) としてのジェンダーというのはジュディス・バトラーが色々な論文で進めたが、その一つは以下の論文である。Judith Butler. Melancholy, Gender/Refused Identification. In *Constructing Masculinity*, ed. Brian Wallis and Simon Watson Maurice Berger. London: Routledge, 1995, pp. 21–36.
- 15) Cynthia Enloe. *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women’s Lives*. Berkeley: University of California Press, 2000.

- 16) 雑誌名が戦争中の『戦友』と違っているのは、自衛隊における軍隊用語の管理の示す一例である。「兵士」から「自衛官」へ、「戦闘機」から「特別飛行機」へ、など、同様の例はたくさんある。
- 17) ここには用いるのは、R. W. コンネルが1995年に発表した男らしさの分析における概念と一緒にである。R. W. Connell. *Masculinities*. Berkeley: University of California Press, 1995, p. 37.
- 18) Judith A. Allen は欧米の歴史における男らしさに関する危機感を以下の論文で検討した。Men Interminably in Crisis? Historians on Masculinity, Sexual Boundaries, and Manhood. *Radical History Review* 82, 2002, pp. 191-207.
- 19) Joshua S. Goldstein, *War and Gender*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- 20) 結束性とジェンダーのステレオタイプとの関係について研究は以下の代表的な例がある。Elisabetta Addis, Valeria E. Russo and Lorenza Sebesta. Introduction. In *Women Soldiers: Images and Realities*, ed. Valeria E. Russo, Lorenza Sebesta and Elisabetta Addis. New York: St. Martin's Press, 1994, pp. xi-xxiv. Cynthia Enloe. *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*. Berkeley: University of California Press, 1990; *Sexual Politics at the End of the Cold War: The Morning After*. Berkeley: University of California Press, 1993; *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*. Berkeley: University of California Press, 2000. Mary Fainsod Katzenstein. 1998. *Faithful and Fearless. Moving Feminist Protest Inside the Church and Military*. Princeton: Princeton University Press. Lois Ann Lorentzen and Jennifer Turpin, eds. *The Woman and War Reader*. New York: New York University Press, 1998.
- 21) Sabine Frühstück. 2003. "Nur nicht kampflos aufgeben!" Die Geschlechter der japanischen Armee ("争いなしで絶対に任せない!") 日本の自衛隊におけるジェンダー). In *Gender und Militär: Internationale Erfahrungen und Perspektiven* (『ジェンダーと軍隊——国際的な経験や観点』), ed. Christine Eifler und Ruth Seifert. Berlin: Ulrike Helmer Verlag (Heinrich Böll Stiftung), pp. 155-187 で、私はその結束性と婦人自衛官を受け入れることとの関係について議論した。
- 22) この問題についての議論としては以下の論文がある。Robin Wagner-Pacifci and Barry Schwartz, "The Vietnam Veterans Memorial: Commemorating a Difficult Past," *American Journal of Sociology*, 97 (2), 1991, pp. 376-420. Laura Hein and Mark Selden. *Censoring History: Citizenship and Memory in Japan, Germany, and the United States* Armonk, NY: M. E. Sharpe, 2000. 日独研究には以下の研究がある。Volker Fuhr. Von der Bundesrepublik lernen? Der Vergleich mit Deutschland in der japanischen Diskussion über Kriegsschuld und Vergangenheitsbewältigung (『ドイツに倣うのか——戦争責任と過去の打勝についての論争におけるドイツとの比較』). *Japanstudien* 8, 1996, pp. 337-353. 金子マーチン「大学の戦争——戦後責任と『太平洋戦争家の青春展』について」『日本女子大学人間社会学部紀要』第8号, 1998年, 101-126 ページ。Petra Schmidt. Wiedergutmachung in Japan (『日本における戦争補償』). *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 161/162, 1997, pp. 135-168.
- 23) 岡良輝編『平成の自衛隊』東京, 産経新聞ニュースサービス, 1998年, 88 ページ。
- 24) 千石保『日本のサラリーマン』東京, 日本放送出版協会, 1982年, 3 ページ。
- 25) 中牧弘允「序章 経営人類学にむけて——会社の「民俗誌」とサラリーマンの「常民研究」

- 中牧弘允・日置弘一郎編『経営人類学ことはじめ——会社とサラリーマン』東京、東方出版、1997年、13ページ。
- 26) 浅井春夫他が編集した『日本の男性はどこから来て、どこへ行くのか』や西川裕子・荻野美穂が編集した『共同研究 男性論』などでは、日本における男らしさには歴史があり、文化的に構築されていることが指摘されている。浅井春夫「男性形成論概説」『日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』浅井春夫、伊藤悟、村瀬幸浩編著、十月舎、2001年、12-30ページ。西川佑子「男の甲斐性としての家づくり」『男性論』西川佑子・荻野美穂編、人文書院、1999年、245-274ページ。欧米にも日本における男らしさについて最初の研究結果がある。例えば、James Roberson and Suzuki Nobue, eds. *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*. London: Routledge, 2002.
- 27) 国際平和協力業務に参加した米軍人にインタビューしたローラ・ミラーによると「人を助ける」訓練を全くしていない米軍人は国際平和協力業務はどちらかというと女性的な仕事として考えており、フラストレーションを感じる人が多い。ミラーが紹介する「戦士から人道主義者（ヒューマニタリアン）へ」の変換は、米軍のような「闘う軍隊」には最も難しいかもしれないが、自衛隊においても、このようなジェンダー意識は働いているのであろうか。Laura L. Miller and Charles Moskos. Humanitarians or Warriors?: Race, Gender, and Combat Status in Operation Restore Hope. *Armed Forces & Society* 21 (4), 1995, pp. 615-637. ミラーが提案した戦士から人道主義者／ヒューマニタリアンへの変換は、前述のモスコスとパークがいうところの「ポストモダンな軍隊」と似ている。Charles C. Moskos and James Burk. The Post-modern Military. In *The Adaptive Military: Armed Forces in a Turbulent World*, ed. James Burk. New Brunswick, London: Transaction Publishers, 1998, pp. 163-182.
- 28) 軍隊内の男らしさに関する不安定さは皇軍においても存在した。Sabine Frühstück. *Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan*. Berkeley: University of California Press, 2003, pp. 26-41.